

博物館だより

No.48

平成22年4月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

みやこゆかりの先人展

近代「製麻業」創始の兄

元号「昭和」創案の弟

吉田健作と吉田増蔵展 part2

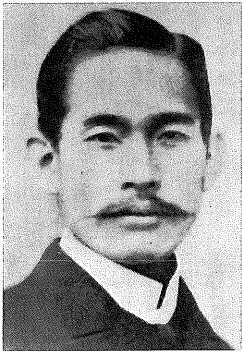
4月27日(火)～6月13日(日)

当館では、4月27日(火)から6月13日(日)まで、みやこゆかりの先人展「吉田健作と吉田増蔵展」Part2を開催致します。

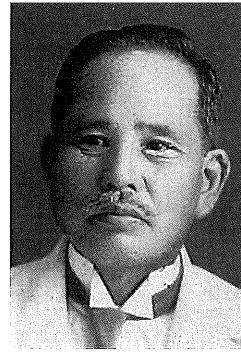
吉田健作・増蔵兄弟は、現みやこ町勝山上田の出身で、兄健作は内務省の官僚として近代製麻業(麻布等の生産)の発展に尽力し、弟増蔵(学軒)は、宮内省の官僚として、元号「昭和」を創案するなど、いずれも近代日本の歩みに大きな足跡を残しています。

とくに、弟増蔵に関しては、昨年当町で顕彰会が発足し、「吉田学軒顕彰祭」が開催されるなど、地元を中心にその業績が注目を浴びています。

今回の企画展は、昨年開催した同名の企画展を、より充実し



▲吉田健作



▲吉田増蔵

た内容にリメイクし、健作・増蔵ゆかりの品々や故郷上田に関する古文書類等、約200点を展示します。

ぜひ、ご来館ください。

開催期間

平成22年4月27日(火)

～6月13日(日)

開催場所

みやこ町歴史民俗博物館展示室

観覧料

常設展示の観覧料でご覧いただけます。

大人

200円

高校生以下

100円

主な展示品

- ・吉田健作・増蔵の書
- ・内務省・宮内省辞令
- ・製麻業機械図面・文献
- ・上田村絵図面
- ・幕末～明治期の御用日記

博物館友の会

会員募集!

みやこ町歴史民俗博物館友の会では、平成22年度の会員を募集しています。

博物館友の会は「故郷を愛するには、まず故郷を知ることから」をモットーに、講演会やバスハイイク、史跡めぐりなどの行事を行っています。

平成21年度の会員数は約210名で、いかなる団体からも補助は受けず、会費収入のみで独立採算で運営しています。興味のある方なら、どなたでも参加いただけます。ぜひ、ご入会ください!

入会の方法

博物館の窓口で会費を納めてください。

年会費

個人会員 3000円

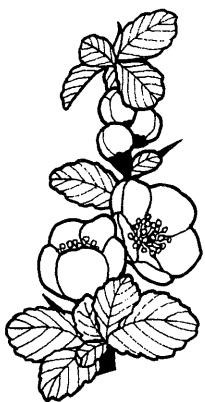
家族会員 1名2000円

※年度途中入会者は月割会費

お問い合わせ先

博物館内 友の会事務局

☎0930・33・4666



《古文書解読コーナー》

① 羽織

② 〈ヒント〉面会すること

③ 日記

④ 〈ヒント〉見ること

⑤ 傳書

⑥ 〈ヒント〉人づてにきく

⑦ 支那

⑧ 〈ヒント〉準備

⑨ 男行

⑩ 〈ヒント〉苦勞すること

◎答え

(反対向きに見てください)

- ① 掛軸
- ② 見立
- ③ 團行
- ④ 支那
- ⑤ 折書
- ⑥ 日記
- ⑦ 傳書
- ⑧ 準備
- ⑨ 男行
- ⑩ 苦勞

みやこの歴史発見伝37 春告神事・英彦山御潮井採

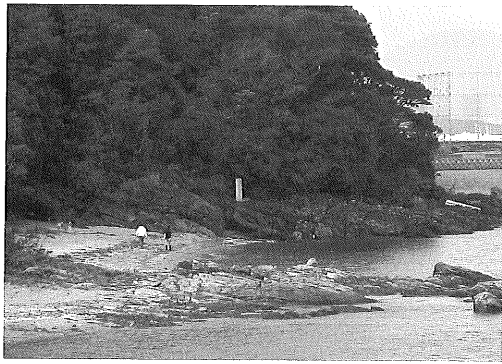
— 千年の伝統を誇る「山の神」からのメッセージ —

京都平野に春を招く行事

この号が出るころは桜も満開で京都平野は春爛漫と言ったところでしょうが、かつて「京都平野に春が来るのはこの行事のおかげ」と信じられていた行事が、ある道を通して大掛かりに行われていたことをご存知でしょうか？

御潮井採とそのルート

行事とは「英彦山御潮井採」と呼ばれる英彦山神宮が現在も行っている神事のこと、道は下図に記すルートを指し「お潮井採道」と呼ばれています。



▲御潮井採の最終目的地・姥ヶ懐



▲御潮井道を進む神使と地元の案内人（行橋市今井）

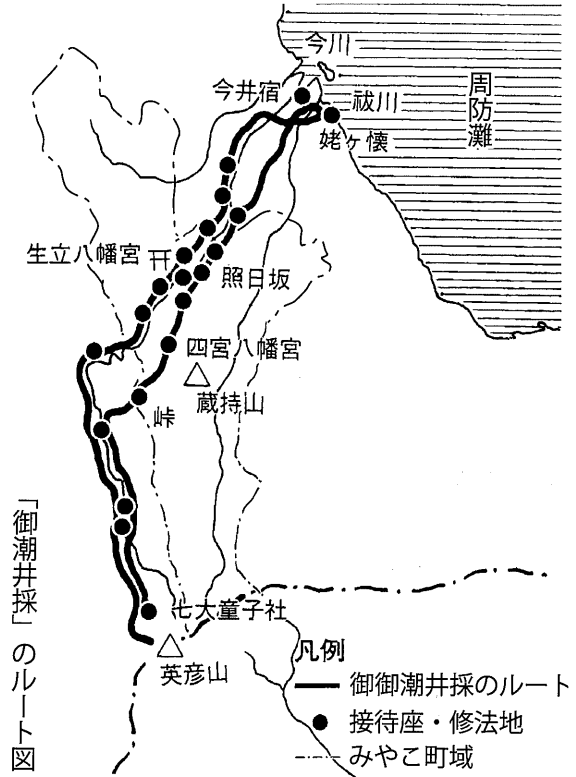
これはその昔、英彦山の山伏たちが山の大神にして天下泰平と五穀豊穰（逸）を祈る勅祭「松会」（旧2月15・16日）に用いる海水を姥ヶ懐（行橋市菅尾にある海岸洞穴）まで汲みにかけていたことに因むもので、その距離と内容から別名を「九里八丁（約40kmまたは垢離（ごり）水行のこと）八丁の御潮井道」ともいいました。

御潮井採そのものは旧暦の1月26・27日の両日にわたって行われ、その起源は天曆年間（10世紀）に遡ると伝えられます。松会の大前年とされ、次のよ

うな内容で行われました。

まず初日の深夜一時、英彦山北坂本にある七大童子社に当役（当番）の山伏が集合（多いときはその数50人にも及んだといいますが大掛かりな行であったことが偲ばれます。点呼の後一行は松片手に今川沿いを一路杵尾を目指して下り、途中赤村からは峠越えで喜多良へと入り、四宮八幡宮で道中第一とされる接待座が催されます。ここでは神事や修法ののち村人への厄除祈禱や護符配りが行われます。多くの人が無病息災を願ってわれ先にと山伏に駆け寄り、頭に載せてもらうと一年間無病息災という法螺貝を有難く頭に押し戴きます。

やがて大熊・本庄・統命院でも同様の祈禱や修法をしながら



「御潮井採」のルート図

照日坂を越えて豊津に入り、柳井田を経て夕刻、今井の宿・奥家へと至ります。同日深夜になり奥家を出た一行は姥ヶ懐で他見無用とされる秘密の行を行い、厳寒の海中に肩まで浸かつて三升の潮井を汲み、未明に宿へと戻ります。朝、「潮井珠」と呼ばれる蛤や潮吹貝の奉納を長井浜集落から受け、一行は今井をあとにします。

帰路は彦徳・花熊・大村・山鹿・柳瀬・崎山を経由して往路同様の祈禱・修法を行い、そのまま今川沿いに山へと帰り、潮井を英彦山上宮へと奉納し一連の行事を終わります。

御潮井採に託された人々の想い
この御潮井採が済むと冬も終わり春が迫ったことを京都平野

の人々は知り春田の準備にかかります。そして松会の終了とともに英彦山から流れ出る川の水を使った田植えが本格化します。まさに山伏たちは山の神の使いとして里に春の訪れを告げていたわけで、京都平野の人々もこれを以て季節の変化だけではなく山の恵みや流域の人々との繋がりを実感していたようです。

なお、行は現在も行われていて2月末日と3月1日、英彦山神宮から5人の神使が昔と変わらぬルートを辿り行っています。但し、移動手段は車となつて各地の接待座も町内では喜多良と生立社のみになり昔日の賑わいはありませんが、関わる人たちはこの行事を通して今なお山と里・海の繋がりが互恵共存の関係を再確認しているようです。

このように現代的課題にも十分応え得るメッセージ性を持つ行事が、千年の時を超えて故郷に伝えられている意味を、今私達は改めて考えてみる必要があるように思えます。（木村達美）



▶道中の家の戸口に貼られた護符（犀川山鹿）